

精神科

コロナ禍でのメンタルヘルスを憂慮 多彩な活動プログラムで治療・回復

医療法人 志仁会

西脇病院

長崎県長崎市桜木町3-1-4 TEL 095 (827) 1187



西脇健三郎 理事長・院長

(にしわき・けんざぶろう)
1972年大阪医科大学卒業、同年長崎大学医学部精神科医局入局、長崎県立東浦病院医長を経て、82年から現職。漫画「ブラックジャック」による精神科編のモデルとしても知られる。

精神疾患だと指摘する。

現在の精神疾患は、大きく二つの流れに分けられる。一つは統合失調症で、戦後しばらくはこの患者がほとんどを占めていたが、現在は激減。代わって、新たに台頭してきたのが、うつ病とアル

コールやギャンブルなどの依存症である。

精神疾患は今やがんや脳卒中などと並ぶ五大疾病の一つに数えられるほど、その割合は増えているものの、現在の精神医療は、「こうした疾病構造の変化に対応できていない」（西脇理事長）とする。

社会に未曾有の混乱と不安をもたらした今回の新型コロナウイルス禍は、社会、経済の停滞と疲弊とともに、人の心に荒廃を招くなど、メンタルヘルス（精神保健）にも影響を与えている。医療法人志仁会（長崎市）が運営する西脇病院の西脇健三郎理事長・院長は「治療、回復のための切れ目ない支援体制の整備が不可欠だ」と訴える。

西脇病院では、今年3月末から、「相談」

「外来」「入院」の項目別に新型コロナ関連の精神疾患の動向をまとめている。現在までに、コロナ禍が直接的に影響したと推測される患者数は伸びていない。「だが、自然災害時にも見られるが、今後2、3年のうちに急増する。とくに今回は、医療従事者が気がかりだ」（西脇理事長・院長）と見ており、そのほとんどがうつ病やもろもろの依存症の

が、もろもろの依存症の的確な診断と治療のすすめ方を身に付けていない」と指摘。同院に精神科や心療内科からの紹介で受診する依存症患者の6割以上が依存症以外の診断名で治療が行われたり、また、精神科や心療内科を掲げる医療機関でも「門前払い」、「治療が中断」のケースが少なくないという。特に、プライドなどから自分の病を受け入れられない「否認」の問題を抱える依存症を治療につなげるのは難しい。そのために臨床

の実践知が問われ、経験豊富なノウハウが重要となる。

そして、ポストコロナとプライド・「否認」

について考察を深めた西脇理事長によれば、「コロナ禍の経済に対する影響は著しい。多くの職業人は経済的な課題のみでなく、彼らがこれまで培ってきた誇り、プライドも打ち砕かれている。そんな状況から立ち直るのは容易ではない」と指摘。「そこで立ち直りがかなわなかったり、または克服するのに多くのエネルギーを要する場合、『喪失』あるいは『燃え尽き』からうつ病、もろもろの依存症に陥るのは自明のことだ」とし、「その先の自死が懸念される」という。その対策は急務であるが、現状は、そんな精神医療に対する関心と対策が充分とはいえない。今こそ「経験豊富な臨床の実践知が重要である」と、西脇理事長・院長は精神医療の現状を憂慮する。

併せて、精神医療関係者に次の3点を提言する。1つ目は、アルコール、薬物、ギャンブルなどと区別することなくすべての依存症に対して向き合う心構えについて。次にうつ病などの他の精神疾患と依存症とは合併重複していることが多いのを踏まえた治療技術について。最後に当事者グループ、家族会と上手に付き合う姿勢の大切さについて。これら3点の実践こそが重要だとする。そこで、西脇病院では、3密には充分留意したうえで、うつ病の復職に向けた集団認知行動療法、依存症の回復支援などの集団療法は継続すべし、といった姿勢を貫いていく方針だ。